



関東地方整備局 東京国道事務所 共同溝課 酒井 健

§ 1. 東京国道における共同溝整備の概要

東京国道事務所(以下、「東京国道」)は、東京都区部の一般国道 10 路線、延長 161 kmの維持・管理・整備を担当している。管理国道内には、私達の生活に不可欠な電話・電気・ガス・上下水道等延べ約 5,600 kmのライフラインが収容されている。共同溝とは、道路環境の保全、災害時のライフラインの信頼性向上、将来需要への対応等を整備目的とし、道路の地下空間を利用し、これらのライフラインのうち主要な幹線をまとめて収容する施設である(図-1)。

2003(平成 15)年末現在、東京国道管理区間 161 kmのうち約 7 割にあたる 106 kmで共同溝の

整備が完了している(図-2)。現在では、共同溝を環状方向に連結する他、河川分断部や都心部での整備も促進し、共同溝の相互連結によるネットワーク化を進めている。

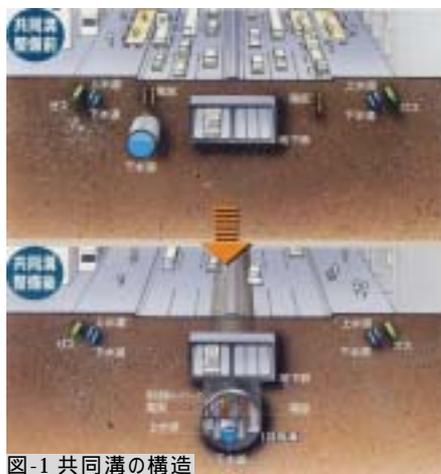


図-1 共同溝の構造



図-2 東京国道管内共同溝整備状況

§ 2. 東京ジオサイトプロジェクト 1 の実施

2003(平成 15)年は、道路構造の保全と円滑な交通を図ることを目的とし、共同溝整備を本格的に推進していききっかけとなった、「共同溝の整備等に関する特別措置法」が 1963(昭和 38)年に制定され、ちょうど 40 年目にあたる年であった。東京国道では、これを記念し、社会資本としての共同溝が、日常生活に密着した重要なインフラであることを広く一般市民の方々に知ってもらおうという目的で、PR プロジェクトの開催を企画した。

プロジェクトの企画にあたり、プロポーザル方式により複数の業者から提案を募り、工事現場で博物館を開くという提案を採択した。実際の運営にあたっては、この案をよりブラッシュアップするため、プレーンストーミングを行い、関係者以外の方々からの既成概念にとらわれないアイデアを広く集めることとした。この中では、コンサートなど文化的なイベントを実施する等実に様々な提案が挙がったが、今まで共同溝については、「土木技術を駆使し、いかに安全に整備・管理するか」という機能面でのみ捉えていた我々関係者は、「地下空間は面白い!」という人々のアイデアに新鮮な感動を覚えた。

その後、この地下空間の写真を見て関心を持って頂いた能楽師で宝生流 19 世宗家の宝生英照氏から演出の協力を申し出て頂いたことで、工事現場で狂言を開催するという計画が現実化することとなった。「地下にあり存在を意識されない共同溝工事現場そのものをコミュニケーションとアカウントビリティ(説明責任)の実験場として活用し、その存在と役割に誰もが関心と興味を持つようなプロジ

エクトを実施する。」ことを趣旨に、共同溝の工事現場を3日間だけ文化的な目的で使うことに挑戦する実験的プロジェクト「東京ジオサイトプロジェクト」を開催することとした。実施概要は下表(表-1)のとおりである。

表-1 東京ジオサイトプロジェクト1 実施概要

開催期間	2003(平成15)年11月18日(火)(土木の日)から11月20日(木)までの3日間	
開催場所	東京都港区虎ノ門1丁目 虎ノ門交差点地下 麻布・日比谷共同溝虎ノ門立坑	
開催内容	内容	実験テーマ
	巨大な縦穴を能楽堂にしてみる「地底能楽堂計画」	巨大な共同溝の縦穴を能楽堂に見立て、地底40mにこれまで誰も見たことのない地底の幽玄の世界をつくり出す実験。その特殊なコンクリート空間の文化的可能性を追求する。
	交差点の下を博物館にしてみる「地底博物館計画」	交差点の地下10mに広がる約1,200㎡の地底の作業ヤードを博物館のギャラリーに見立てる計画。むき出しの土と鉄骨の空間でインフラの作られ方を知る。
	地底のトンネルを癒しの空間にしてみる「やすらぎトンネル計画」	立坑からのびる麻布共同溝トンネル部を癒しのゾーンとして開放する計画。虎ノ門立坑から「やすらぎのキャンドルゾーン」150mを徒歩で往復できる。
	工事現場の塀をメディアにしてみる「フェンスラップ計画」	工事現場のフェンスはメディアになるか？ 当たり前のようにそこに立っている工事現場をしきる塀に意志をもたせたら街の風景はどう見えはじめるか。

会場は、霞ヶ関官庁街の一角、一般国道1号(桜田通り)と外堀通りが交差し1日約8万台の交通量がある虎ノ門交差点の地下、日比谷・麻布共同溝の虎ノ門立坑である。

ここは、交差点直下に面積約1,200㎡、深さ約10mの五角形の路下ヤード、更にその下に直径約20m深さ約40m(地下10階相当)の円筒状の立坑からなる地底空間で、ヘルメットを着用し、工事用エレベーターや階段を使わないと辿り着けない。通常の現場見学会では、少人数のグループで見学するが、狂言を鑑賞するためには150人が同時に現場に入ることになる。そのため事前準備にあたっての最留意点は、徹底した安全管理であった。これについては、東京国道・コンサルタント・JV(施工業者)が連携し、警察や消防と相談をしながら、綿密な安全管理計画を策定した。



写真-1 東京ジオサイトプロジェクトが実施された虎ノ門交差点



写真-2 「フェンスラップ計画」(11/3(月)～実施)

また能舞台や楽屋の設置などの運営計画については、工事現場の特徴を生かしながら、かつ狂言の実演に支障の無いよう、宝生氏の指導を受け細心の注意を払い進めた。一方、外部への告知と「地底能楽堂計画」の参加者の募集は、テレビ・新聞・雑誌等マスコミへの記者発表と公式ウェブサイト(URL <http://geo-site.jp/>)を立ち上げて行った。公式サイト公開直後から関心は高く、開催直前迄の総ヒット数は延べ約58万件にのぼった。

開催3日間を通して約1,000名が実際に共同溝の現場を訪れた。11月18日(火)(土木の日)に実施した「地底能楽堂計画」(写真-3)では特別招待者募集に12倍の約1,200件の応募があり、その中から抽選で当選した100名は、らせん階段と工事用エレベーターを使い地底40mに設けられた地底能舞台前の特設席に着席、司会者の荒俣宏氏(博物学者)と宝生英照氏、野村萬齋氏(狂言師)によるトークショーに続き、野村萬齋氏らによる狂言「磁石」が上演され、ふだん体験出来ない異空間での「幽玄の美」を堪能した。

翌11月19日(水)と20日(木)は、「地底博物館計画」、「やすらぎトンネル計画」(写真-4)として一般公開した。非常に熱心に見学された方が多く、関心の高さに驚かされた。また女性グループの見学者が多かったことも特徴的であった。この模様は、ニュースあるいは特集として当日や翌日のテレビや

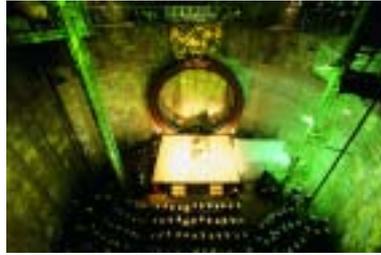


写真-3 「地底能楽堂計画」(11/18(火)(土木の日)実施)

写真-4 「地底博物館計画」「やすらぎトンネル計画」(11/19(水)～20(木)実施)

新聞をはじめ、雑誌等で幅広くとりあげられ、共同溝の存在意義を大いに示すことができた。

また期間中、プロジェクトの印象・共同溝認知度・今後の広報に対する要望などについて、会場内で来場者アンケート調査を実施した。アンケート結果のうち、このプロジェクトを知った理由には「知人を通じて」が1/3と最も多く、口コミ効果がうかがえる興味深い結果であった。共同溝認知度については、「聞いたことがある」を含めると約6割が認知していることが分かった。実際に共同溝の工事現場を訪れた感想については、約9割が「新しい発見があった、感動した」と答えており(図-3)、「自分たちの毎日の生活が、このような形で守られていることを知った。」「都心の地下という異空間で伝統芸能を見せるという試み、そのセンスに脱帽です。自分たちの納めた税金がこういう所でこのように使われているということを現実に目の当たりにでき、とても意義

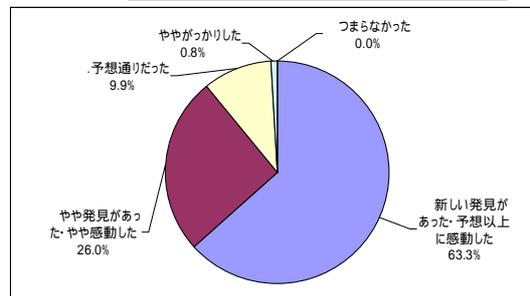


図-3 来場者アンケート結果「共同溝の中に入ってみたいの印象はいかがでしたか」(N=354件)

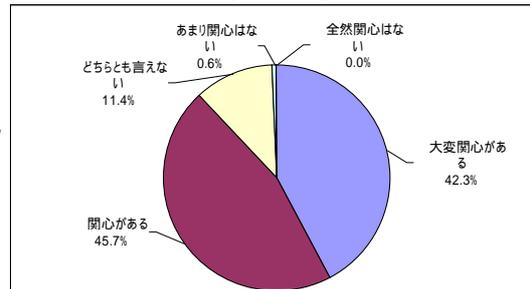


図-4 来場者アンケート結果「共同溝など社会資本整備に関する情報発信について」(N=324件)

深い。理想的な「国と納税者の相互理解」の場である。」などの意見が述べられていた。また公式サイトには、プロジェクト終了後も意見などが多く寄せられ、アクセスが継続した。

§3. 東京ジオサイトプロジェクト2の実施

日比谷共同溝事業では、今年5月工程上の山場であるシールド掘進を開始した。そこでこのシールド掘進のタイミングを、都市再生及び社会資本整備の有効なアカウントビリティ機会とするため、広報計画を立案した。実施に当たっては、公式サイト等に寄せられた意見を十分活かし、従来事業関係者だけのものではあった発進式を、一般市民にも興味深く見られるよう安全に公開し、事業への関心と土木技術者への共感を広める機会として、東京ジオサイトプロジェクト第2弾を実施した。外部への告知と「発進式目撃計画」の参加者の募集は、前回同様、記者発表と公式ウェブサイトで行った。実施概要は下表(表-2)のとおりである。

4月23日(金)午前の「発進式目撃計画」(写真-5)には、20倍を超える一般からの応募があり、こ

の中から抽選で当選した 30 組 60 名と来賓、関係者を招待し実施された。午後と 24 日(土)は、「沈黙のシールドマシン展」(写真-6)として地底を切り開くトンネル掘削ロボット「シールドマシン」の全貌を公開し、工事現場を巨大構造物と地底の技術を知る体感ミュージアムに見立て一般公開した。

表-2 東京ジオサイトプロジェクト2 実施概要

開催期間	2004(平成 16)年 4 月 23 日(金)から 4 月 24 日(土)の 2 日間	
開催場所	東京都港区虎ノ門 1 丁目 虎ノ門交差点地下 麻布・日比谷共同溝虎ノ門立坑	
開催内容	内容	実験テーマ
	発進式目撃計画	シールドマシンの始動は強大な土圧との闘いの始まり、エンジニアたちの願いが込められるその瞬間を目撃する。
	沈黙のシールドマシン展	動き出したら進入禁止、謎の巨大装置の内部に潜入できる特別見学ルートを設定。土木の概念を超越した驚異のシステムを探索する。
	1. 第 1 展示室 -ファクトリーゾーン- 2. 第 2 展示室 -発進ドームゾーン- 3. トンネルギャラリー 計画	地底 40m に静止し掘進開始の時をじっと待つシールドマシン掘削部を目の当たりにする。人目に触れたことのない切羽部やマシン内部構造をのぞき見る。 都市の変貌を見つめるカメラマン内山英明氏の地底写真 50 数点を共同溝トンネル内部に展示。虎ノ門の地下 30m に全長 60m の写真ギャラリーが出現する。



写真-5 「発進式目撃計画」(4/23(金)実施)



写真-6 「沈黙のシールドマシン展」(4/23(金)～24(土)実施)

開催 2 日間で約 1,800 名が現場を訪れ、一時入場待ち最高 3 時間となるほどであった。この模様もテレビや新聞、雑誌等で幅広くとりあげられた。

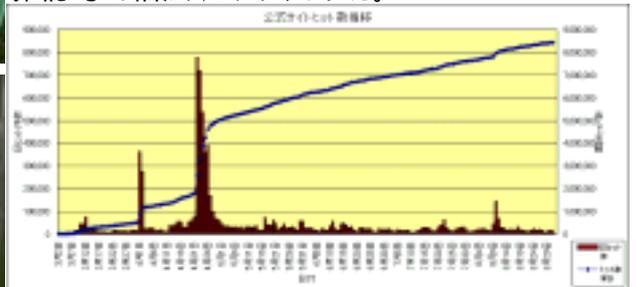


図-5 東京ジオサイト公式ウェブサイトへのアクセス

公式サイトへのアクセスは、第 2 弾のリニューアル(3 月 2 日)直後から非常に関心が高く、開催期間直前には最大約 80 万件/日のヒットがあった。開催終了後も継続的なアクセスがあり、平成 16 年 8 月末時点での累計総ヒット数は約 850 万件となっている(図-5)。

§4. 今後に向けて

来場者アンケート結果やマスメディアからの反応の分析、またこの経験を、今後共同溝等の都市インフラ整備をはじめとする、公共施設・社会資本整備の説明責任、情報発信や合意形成の方法の検討に役立てていきたいと考えている。社会資本整備におけるアカウントビリティ(説明責任)は、まず社会資本について正しい情報を知ってもらい、国民と行政との信頼関係を構築することから始まるのではないかと考えている。

また、この実験的プロジェクトの当初の目的である、「共同溝工事現場そのものをコミュニケーションとアカウントビリティ(説明責任)の実験場として活用し、その存在と役割に誰もが関心と興味を持つようなプロジェクト」としての効果は、一定の成果を収めることができ、また我々プロジェクト主催者だけでなく、当日場内説明等で協力して頂いた共同溝工事にかかわる JV(施工業者)の人々の、仕事への自信と誇りをもたらすことになったことと確信している。

これからも、さまざまな機会を捉えて、社会資本整備についての説明責任、情報発信や合意形成の一つの形として、このような、一般市民が直接触れて、正しい情報を知ることのできるコミュニケーションの場を積極的に提供していきたいと考えている。

以上